

1. 桜江大橋周辺視察から ～どのようにして復興していったのか？～

桜江大橋、そして川戸駅周辺というのは桜江町の中心部ですが、ここを昭和47年に大水害があり、町が壊滅的な状況となりました。47水害という言葉は、県東部に住む私としては、聞くことはあっても、あまり実感のあるものではなかったのですが、現地へ赴き、当時の水害の様子を記録した写真と照らし合わせることで、いかに大きな災害であったか、ということを知ることになりました。その一方で、現在のまちが、あまりにもあっけらかんと、さも以前からの町であるかのようなたたくまいに不思議な感覚を持ちました。今から約40年前にこの大水害が起こり、一部のコンクリート造の建物を除いて、ほとんどの建物が流され、破壊されてしまった。おそらく、水害の直後というのは先の東日本大震災で津波をかぶった町の様子に近い状況だったと思うのです。東北太平洋岸のまちが被災してからもうすぐ3年たちますが、今だに沿岸部のどの町も、復興の姿が見えてきていないように思えます。桜江の町は、大水害からどのようにして町を復興させていったのか？今回の視察ではそこまでは踏み込むことはありませんでしたが、これまでに経験した大災害後の復興プロセスを掘り下げていくということは、防災まちづくりの大きなテーマではないか、という思いを持ちました。

また、視察では西教寺の本堂において、ちょうどタイミングで47水害の際の写真展を開催していました。今年8月の水害をきっかけとして、住職さんが、水害の恐ろしさを地域住民に忘れさせないように、という思いで開催したとのこと。いざというときの備えにあたっては、一人一人の意識付けが重要であり、そのような意識付けをさせるための先導的な人物、機会が必要だということ、強く感じました。

2. 日貫川視察から ～安全確保、避難の大前提としての地域のつながり～

昭和57年豪雨で日貫川の氾濫によって被災した日貫地区。この水害ののちに、日貫川を大規模に改修したことで、川幅が広くなり護岸もしっかり整備されていました。今年の8月に県西部に豪雨がありましたが、その時の雨量は57年水害よりも多かったとのこと。それでもこのたびの水害はわずかな範囲にとどまったそうです。

視察では日貫自治会の会長さんと、公民館長さんが対応してくださいました。今回の豪雨で大きな水害に至らなかったことの原因に、川のハード面での整備とともに、避難にいたる連絡の仕組みと体制が、地区内ですみずみまで行きわたっていることが、このお二人の話からよく分かりました。まさに、歯に衣着せぬという感じでしたが、行政はいざというときにはあまり頼りにならないなあ、という趣旨の話は印象に残りました。そして、二人が地区内の住民をとってもよく知っていて、どの時点で、どこの家のだれが残されていて、何を必要としていたか、ということをお話されるのです。あたり前のことですが、住んでいる地区の中で、お互いの顔を知っている、そういう地域のつながりが、いざというときの安全確保、避難に重要な意味を持つということ、実感させられたのです。